蕉机落句集

秋

へ 5
4401
3

門へ5
號4401
巻3

昭和九年
九月二一日
購求

蕉堤元尾芙蓉句集

秋之部

山の井入おもき吸ひけりの女郎
人ひとりと四方のちくさの秋
ちやまりて座ひとりとなりの秋
ねまりとかふ男ちやけさの秋

ものいとぬきくらべてすてらるさの秋
数あらハ帽子と巻てけちらす秋
さ位のうけ戸みせくとる秋
江の夫さらにきてうらるさの秋
わちひとも人ハ加茂(まてけさる秋
と絵はあ夫先借にやる宮作拵造
秋笠とけうともよりらさの時
と絵の秋つくまにもるうの毒

秋あ夫や秋ひ秋くとを一支
芋茎
うつうとと秋ら乃ら秋いらさる秋
さい人よ夫されらと絵の秋
る秋や夫ら支傳もつて設
三ハはかと独くけさ乃あ茎
秋のうのようきうきあ乃う
うう秋やすいと自よ入うの春

きてあまできてしらけて出て西へ
あきらつて坊主のちる屋の水
きつ秋入るる星れ江ふく
住よれ秋のせて出るふみ郎
きつ秋でまるきるきる支掛ちち
初あまや法ふるる弁第
梅あまあきの水及伏ふ郎
いまつまでくまきを桂系

梅あでまのおのみれたゆみ
芦のけきでいまつまのふ郎
いまつまでくまを体み青れ出
郎ふかおのあるでおのな
方外できつあきのみつ
郎ふにまの入杖をきる〳〵
華や坊ふうきる青乃水
ふふふにて西ふきふ郎ふ

葉をさてるしにいふやゐ田北の
あたりに碓入白ひをかしく見
給へのほふ菅をたゝ葉をなるなり
うすくれなゐ葉ものや葉のも
ゐてときたてたるさかりこ葉のも
ゐとやこ葉をねらけよ宋やすき
枝にしに者をさはむ葉をんふ
をさまり あをうの葉のさうあい

おなじ歩の遊ぶや葉のひとさうふ
以人のうけきす葉の始れ郎
ものにあくはやちらくと葉のも
ゐくれゐやおもの葉をゐのも
ゐ水のうてうすやさを北京
ゆくをやタはをうけくの葉
相ひをうとおもてもまこの
おきう庵のまあにあふ一葉

梶ひらをやうなる屋造
梶ひらを糸掛て生るを花の姿
七夕をひやうしぬきにかけ
たるをもて生たるを梶
七夕ばかりみほれわする
殊外を淡色にて
こうをゆい紙川掛をの
ちりたるにいまつまれるけす

やうなる代を
七夕を祝ふてこうをき
あまれ宮ひの事おい
ほ合の扇をたるる美女
加茂川ひうにたるを川
掛所をみ四ーこの川
ゑるはものおををもも紙
いはくまたこと白

[illegible]

むしの声と神祠の[illegible]

[illegible]

[illegible]

見のみれば小雪の小雪紙屋こうし
屋のかしぢやへの風とまるより
吉俳よりとのつゆはけるより
ちりつく
すまるとふ男を見るに日暮の
鈴所に失あり市の日ひらき
東ともしるるとも杉のとる
いつる茶屋又逸ひく

鈴所にそのかの雑さあり人ひとあり
人信を叩くとなり降まり小乃家
大寺れ新宅と尺を指の家
海とのの石とを仕く新れつか
ひとなのちまふひらきあるれ
小枝きあとそちあるうハのさかわ
童俳ハて
このまくらに行らくるしふ拾

一ものゝ[illegible]きゝてあきのこゝ
ろのよそ[illegible]れちらへ秋のくも
をちらへちらへ入色とまりゐあきの蝉
ゐれくるきゝ蝉のおとをて秋乃蛙
はくるしやこゝのふくるやものゐ
もりいくゝ入こゝれをやおが
ゐまきわおとをまりくきくゝ
ひ物よりる後生まゝまくゝは

板ゐくゝ[illegible]る雲しやたくゝれ
ゝ乃ゐれきゝぬほやまくゝ
ゝくゝきゝの者になひくゝ[illegible]
ゐ橋乃ゝゝむゝ[illegible]ゝ
ゐ橋れゐやゝ水ゐくゝゐ永れ先
時くゝ乃二日やとまゐゐ橋入くゝ
ひる中にあくゝ作る持板くゝ
奎支ゝ[illegible]くゝのひくを

四月ばかりにもなりぬれば
ちりはてぬ
をりの人よりこゝをとりけるをみるに
夕日のさしこまるにまどろけば
中にに萩とおぼしきもの木枝
一ばかりとおもへどもこれいとゆゑ
なしはものこゝろもおぼえぬ木枝なる
萩ばかりのおもひもてあるの萩の葉

一ばかり萩よりとりてとりて歌をかき
萩の色ほのかにそめるをみるに
ゆゑもなくこゝろもとまらぬ花
ばかりしらぬ四月ばかりにもなる
花の色をみるに
ばかりしらぬ四月ばかりにもなる
とりてやうの例のものの中に
言いとりきさとりのこゝろ
の伏見侍従の歌をかきたる

水おとの景色おもしろきあるさこの邨
雲気高く山やとるはちすの日
いとまおほくてとさこんに
老人のむすめをあつにとか
こんれこるまもなく雑海乃
海をとりの字乃あるしこそ
きるらあと思るれさしわを
先たのこあるふるもしく

使人のこゝろをよくさこ
梅雪うゝ東にのをおろして
ふりとやまし世と鶯よつゝ
おとうれれ松くみりろや萩世
えれぬより牧屋つる宮や萩すま
山ほゝやとをさ世やとやとを
きらとまやとてよとしれの花
水をへきてゝく宋やあちの花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をくれて

村の門にゆきふる日也てゆく
まこゝろ
をくれたる秋の小田入の
くれの時雨ふるほとの世と村す
世をうしの時雨ふるほとの世と村す
時雨ふるとあるもちとゝ
桂木屋入木の葉ゝ
ひとせのうちもとゝ秋ゝ

松ゝせもの時雨ふる秋の月
あるものゝ代もめくあるへ月
をうけゝ秋ふくゝ秋の月
入ゝもゝ月ゝ秋ゝ
時雨ふる秋の月
傘ゝ
ものゝ秋ゝ
ゝ秋ゝ生る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぶをすもかせるもなんさうが
ゆひとつおくるにしのなを見る郎
出かんくゝ過おもつくなんか
義のこゝろ士格乃うへに月見哀
面白ろあゝ有為をもふなんか
業耀たあるてゝこゝはのうんか
まつゝゝく男も月入あるしうか
ゝゝゝくゝ結ふたるゝ月の霧

ゝゝて月見うし月みやし
おしぬくひみぬくひ乃月のを
ゝのなおゝものゝ月乃霧
時ゝゝはゝふんゝゝ月の月
人よゝくゝゝ詠る言ゝうゝの月
ゝ海や月のゆゝもあゝ一業
義のを孫に出あはゝくあきみな
堅田にゝ

月代やてんの人色入雲にひらく
八月十三夜 其角
庵にをとこ寄つく
夕の霧ちるまさりに涼乃入
結雪を伏見ふるて
月代ふ光雲入やまれ雨
十六雪れ雪ふ雨のせうしを
いさよひやきつふ乃色の高馬

十六雪へやてんにをふ新の雪
ふ鍬をる少まかきてを夜ふ
生まりのいつく生ふ新ふ雪
ひとにおいにちいさ雨ふ
秋の雲れ光とまつてタ日ふ
タふをてにをつく蕎の雪
江を過てふ付ふ蕎の色
日入さつてひとを色の庵

和葉やうをとりてる絵のこと
さとの蒔あまくさかし業をも
業のるやはの藏るらすも生く帝
夕新と有るやひとおきくのも
信の八杉きくくたせとの業
まくのふいやすりにるかくは
ひとの業にあもはまくを
切りにもふやを業八皆あき

きくきくやひと動しくおきうく
烟まくをおにはの業くの元
あとまりおあり杉をを業の
業ゆをあにまくしおあ発し
まをぬくまを桶のくやを業の
言杉を言風くよくをくを元
夕月へまいくうよ我まくの元
かくやしきの業ふうとた

やとる人に第一て
はなはだしく吸ひきたる白ひるを
しつかに煮て
さて長くたとよきみの和菜か
さてはのちはふかきを入るちか
よう清く味噌のうへ入れ和菜を
見面にて
和菜うに糸かつをを入れ出す

白ゐる城のもとにて十五夜申
乃刻ひつけ屋を張り
とみる十場をわりち
定めさふ成まうて
拵と和菜入れあるもの
を傍する十成本ことを
四ちもとまきて人々ちあ
ちとひ乃ひ仕ちち秋を

[illegible]

[illegible]

甲午乃年東武にくだる歌

人しれぬおくの秋風

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うつむいて梅人きうの秋の花
三度むいはゆ情あくるる梅の紅
はあるもの世の歩りるる八中
暮秋八ッ橋まで
ぎ八幡宮まで行き高きむ山きるる
るるるるる秋きれりることこの山
伊勢の海の
見るものきるいせん石あの山

鈴鹿あるるにちさるにやき
るるるを峯入るるまるる
にさしてあるるれを
るるるるるるるあらん鈴鹿山
椿本八幡宮こるき神社
なるるるるるるるるるるるる
伯るに只大ある椿の木のみ
あるるるるるる

東京都立中央図書館蔵

あらと恪あれを郎ることなく
世はれいわきあるとい
秀詩ひまる人に弟しく
弟くらて拾くむ法すせ家の社
姫川せ有さくはらをみくり
立山よりまもちしあきませ
甲申秋九月修学院へ庫
幸ふらを加茂はみちと

ふるみくまたくまたく
比叡山くわらせ杉をとうとく